福岡市埋蔵文化財調査報告書第1298集

麦野A遺跡8

― 麦野A遺跡第22次調査報告 ―

２０１６

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから中国大陸や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されています。しかしながら、都市の発展に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、本市の重要な責務として発掘調査を行い、記録保存を行っています。

本書は、博多区麦野２丁目における個人専用住宅建設に伴う麦野Ａ遺跡第22次発掘調査について報告するものです。本調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡や、奈良時代のカマド付竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されました。また弥生時代後期の住居跡については麦野Ａ遺跡では初めての発見で、周辺遺跡とあわせて弥生時代の集落の変遷を考える上で貴重な成果となりました。

これらの調査成果の報告により、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から報告書作成にいたるまで、ご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成28年３月25日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成25年７月16日から同年８月16日まで発掘調査を実施した麦野Ａ遺跡第22次調査の報告書である。なお、発掘調査費用負担は国庫補助金を適用している。
2. 発掘調査は、個人専用住宅建設工事によって遺構が影響を受ける範囲（住宅建設範囲および駐車場切り下げ部分）について行っている。そのため敷地の一部は未調査である。
3. 遺構の呼称は記号化し、竪穴建物（竪穴住居）をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、土坑をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、柱穴などピット状遺構をＳＰ、その他の遺構（不明遺構，特殊遺構，近代以降の攪乱）をＳＸとした。
4. 本書の遺構図に用いる方位北は、特に断りがないものは磁北である。磁北は西偏約６。20′である。また調査地内の測量座標は敷地の形状に合わせた任意座標としたが、その任意座標の基準とした杭に、近くにあった国土交通省設置の基準点（都市再生街区基準点）から座標を移動し、国土座標上の位置を求めている。これは世界測地系である。また調査区の標高は、道路下水道局が市立小学校（本調査では板付小学校）に設置している水準点のレベルを移動して求めている。
5. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛雄が主に行ったが、他に佐々木ランディ（当時・埋蔵文化財調査課嘱託職員）、穂園さやか（当時・福岡大学学生）の助力を得た。遺物の実測は、主に土器類を山崎賀代子、（埋蔵文化財調査課技能員）が行い、久住が補足・修正した。その他、石製品類は上方高広（埋蔵文化財調査課技能員）が行った。製図は、遺構図を小畑貴子（埋蔵文化財調査課整理作業員）、山崎賀代子、久住が行い、遺物実測図は山崎が行った。また本書に用いる遺構写真および遺物写真は、全て久住が撮影した。
6. 表表紙写真は、麦野Ａ遺跡第22次調査Ⅰ区全景（西から）、裏表紙写真は、上段が同調査Ⅱ区ＳＣ０１東半（西から）、下段左がⅡ区ＳＣ２１カマド検出状況（西から）、下段右がⅡ区ＳＣ２１カマド完掘状況（北から）である。
7. 本書の編集と執筆は久住が行った。本調査に関する遺物および記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
8. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．調査の記録 …… 5
　1. 調査の概要 …… 5
　2. 検出遺構 …… 7
　3. 出土遺物 …… 16
Ⅲ．調査のまとめ …… 16
ＰＬ．１～４ …… 17～20

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区麦野２丁目17番20における、個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成25年６月７日付で受理した（事前審査番号25−2−267）。

これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野Ａ遺跡（分布地図番号25−0048）に含まれており、周囲の発掘調査および確認調査の成果から、当該地も埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成25年６月25日に確認調査を実施した。その結果、現地表面下35cm ～ 60cm前後で奈良時代前後とみられる遺構と遺物が確認されたことから、遺構（埋蔵文化財）の保全等に関して事業者と協議を行った。

その結果、工事計画は住宅基礎工事や駐車場切下げ造成工事において、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、住宅建設および駐車場造成に伴う工事範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成25年７月12日付で建築主である個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務に関する事前協議確認書を締結し、同年７月16日から発掘調査を実施することになった。なお調査費用については、当該工事が個人建築主による専用住宅建設であるため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助金適用要項に基づき、国庫補助金を適用することになった。

本調査は予定通り平成25年７月16日に開始し、同年８月16日に終了した。資料整理および報告書作成は、平成27年度に資料整理を行い、平成28年３月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は当頁下段の表のとおりである。

２．調査の組織

調査主体：　福岡市教育委員会

調査委託：　個 人

（発掘調査　平成25年度）

調査総括：　経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　宮井善朗
同課調査第１係長　常松幹雄

調査庶務：　埋蔵文化財審査課管理係　川村啓子

事前審査：　埋蔵文化財審査課事前審査係　森本幹彦

調査担当：　埋蔵文化財調査課調査第１係　久住猛雄

（資料整理・報告書作成　平成27年度）

整理・報告総括：　経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄
同課調査第２係長　榎本義嗣

整理・報告庶務：　埋蔵文化財審査課管理係　川村啓子

整理・報告担当：　埋蔵文化財調査課調査第２係　久住猛雄

＜調査基本情報＞

遺　跡　名	麦野Ａ遺跡	**調　査　次　数**	22次	**調 査 略 号**	MGA − 22
調 査 番 号	1318	**分布地図図幅名**	025 井尻	**遺跡登録番号**	0048
申請地面積	145㎡	**調 査 対 象 面 積**	100㎡	**調 査 面 積**	110㎡
調 査 期 間	平成25（2013）年７月16日～８月16日			**事前審査番号**	25 − 2 − 267
所　在　地	福岡市博多区麦野２丁目17番20				

３．麦野Ａ遺跡の地理的歴史的環境と周辺の調査

麦野Ａ遺跡は、福岡平野の中央、御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する遺跡である。この段丘は花崗岩風化礫層を基盤とし、Aso－４起源の火砕流ないし須玖火山灰の堆積による、下層の八女粘土層および上層の鳥栖ローム層と呼ばれる堆積物からなる洪積台地である。今回の調査では、表土直下で鳥栖ローム上面となり、これを遺構検出面とした。麦野Ａ遺跡の他の地点も、多くは台地上であるため削平や表層土の流失、段造成など地形の改変が多く、遺構検出面は比較的浅い深度で検出される鳥栖ローム上面となることが多い。これは、麦野Ａ遺跡から同じ段丘の南

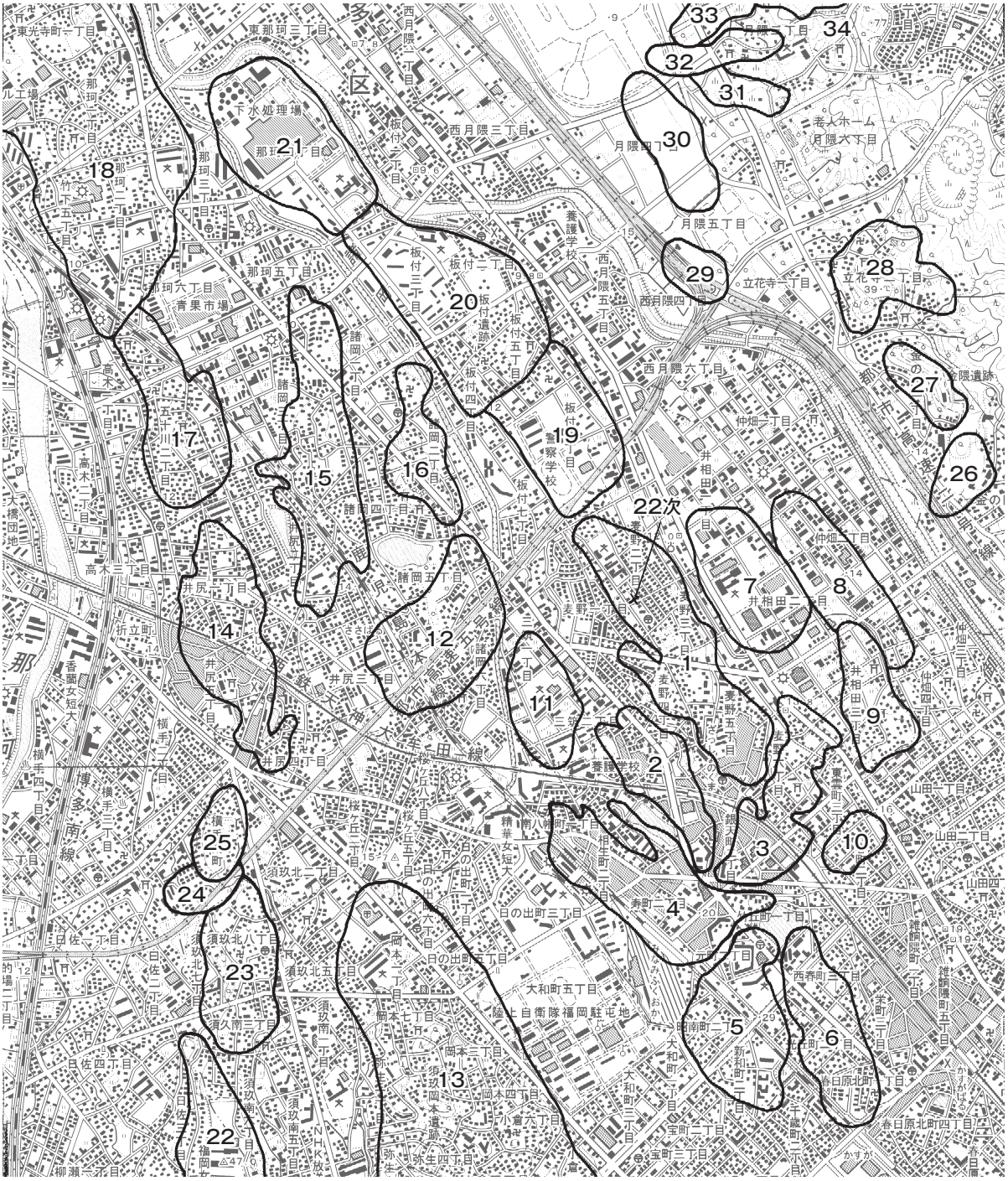


Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

※上記の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）の範囲はおよその範囲であり、調査の進展により変動している。
また上記分布図の範囲中に記入していない包蔵地もある。より正確で最新の情報は埋蔵文化財課窓口にて照会されたい。

（Fig. 1 記入遺跡名）1．麦野Ａ遺跡、2．麦野Ｂ遺跡、3．麦野Ｃ遺跡、4．南八幡遺跡、5．雑餉隈遺跡、6．中ノ原遺跡（春日市を含む）、7．井相田Ｃ遺跡、8．仲島遺跡（大野城市を含む）、9．井相田Ａ遺跡、10．井相田Ｂ遺跡、11．三筑遺跡、12．笹原遺跡、13．須玖岡本遺跡群（春日市）、14．井尻Ｂ遺跡、15．諸岡Ａ遺跡、16．諸岡Ｂ遺跡、17．五十川遺跡、18．那珂遺跡群、19．高畑遺跡、20．板付遺跡、21．那珂君休（那珂久平）遺跡、22．弥永原（曰佐原）遺跡（春日市を含む）、23．御陵遺跡（春日市）、24．笠抜遺跡、25．寺島遺跡、26．影ヶ浦遺跡、27．金隈遺跡、28．立花寺遺跡、29．立花寺Ｂ遺跡、30．下月隈Ｃ遺跡、31．上月隈遺跡、32．下月隈Ｂ遺跡、33．下月隈天神森遺跡、34．下月隈Ａ遺跡

側に連なる遺跡群（Fig. 1 － 2 ～ 6）も同様の状況にある。これら、麦野Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡はいずれも飛鳥時代末から平安時代初期（７世紀末～９世紀前半）までの遺構群が特に多く分布することも共通している。麦野Ａ遺跡の北側には、浅く狭い沖積層の鞍部（谷部）を挟み、高畑遺跡、そして板付遺跡が連なっている。高畑遺跡と板付遺跡は、現状では削平が進み分かりにくいが、本来は遺跡範囲内に古い流路（小河川）や人工的水路があり、水田が営まれたような低い部分や板付の弥生時代初期の環濠集落が営まれた周辺のような本来高い場所もあるので、遺跡範囲がほぼ段丘上にある上記の遺跡群（Fig. 1 － 1 ～ 6）とは遺跡の微地形がやや異なり、起伏がよりあったと考えられる。高畑遺跡と板付遺跡では奈良時代前期に造営された古代官道（山陽道、水城東門ルート）の痕跡（切通しや道路側溝など）が検出され、北側の那珂君休遺跡では未確認だが、南西側の井相田Ｃ・Ａ遺跡や麦野Ａ遺跡ではその延長が確認されている。麦野Ａ遺跡の南側に連なる前述の遺跡群は、段丘が侵食による狭い谷部の開折による八ツ手状になった舌状の段丘の支丘が複数あり、その支丘ごとに存在する遺跡を便宜的に分けて遺跡の単位としている。本遺跡も、南端部の狭い尾根状の鞍部があるが、その南側の麦野Ｃ遺跡と連続した一連の段丘を形成している。また麦野Ａの東側にある井相田・仲島遺跡群（Fig. 1 － 7 ～ 10 他）は、御笠川中流域左岸の沖積微耕地に各遺跡が展開する。弥生時代早期・前期があるが、その後は中期以降古墳前期までが少ない。しかし、古墳時代中期～後期、飛鳥時代の遺構が継続的に展開するのは福岡平野では少なく特記され、方形区画群がある井相田Ｃの一部は、「首長居館」などを含む可能性がある。また遺跡群は古代から中世初期まで官道沿いに一部官衙の可能性がある集落遺構が展開する。

麦野Ａ遺跡が立地する略南北方向に延びる段丘（台地）は、南北約 1.2km、東西約 0.4km であり、現況の地表面標高は約 12 ～ 16.5m である。現代の宅地造成により今は分かりにくいが、戦前の地形図などによれば、北側から開折する狭い谷が数本認められ、かつては水田になっている。また台地の中央西側に標高 16m 前後の緩いピークがあり、北西側に支丘が派生している。台地南側では、２箇所の緩い鞍部が認められ、南端部では狭いがより明瞭な鞍部となり、麦野Ｃ遺跡との間を画している。本報告の第 22 次調査は、今まで調査が比較的少なかった遺跡の北半部西側に位置する。敷地の標高は 14.5 ～ 14.8m で、西側が高く段丘尾根となっている。南側前面道路は東に下がっており、敷地東側では道路面とは１m近い高低差があるが、調査区の遺構の遺存状況からすると、南側道路斜面は後に切通しされたものであろう。したがって現状地形での旧地形推定には注意が必要である。

麦野Ａ遺跡では、これまで 24 次（平成 26 年度末現在）にわたる発掘調査が実施され、縄文時代と推定される陥し穴状遺構も検出されているが、弥生時代から中世の遺構が主体を占めている。主たる時期は奈良時代を前後する古代（飛鳥時代末～平安時代初期）であり、竪穴建物（竪穴住居が主だが全てが「住居」とは限らないので「建物」とする）を主要遺構として構成される集落遺構が展開するが、７次調査では柵列・門・推定方形になる区画溝で構成される奈良時代の官衙遺構が検出されている。弥生時代は、遺跡中央部東側の 18・20 次などで前期の竪穴建物や貯蔵穴が検出され、段丘の東斜面側に貯蔵穴、その西側の段丘尾根上に竪穴住居群を配置する集落景観が想定される。前期の遺構群は、より東側の沖積微高地に展開する仲島・井相田遺跡群の同時期の遺構群と一連のグループだろう。

Fig. 2　麦野Ａ遺跡 22 次調査の位置と周辺（1/750）　0　30m

しかし中期以降は遺構がほとんどない。遺跡北端の13次では土坑から中期後半の広口壺の破片や、後期中頃の鉢（報告では「古墳時代」とするが器形は弥生後期土器）が出土するが、位置的に北側の高畑遺跡群の展開と関連しよう。ただし、本報告の22次で中期後半頃の甕形土器片や、後期中頃の竪穴建物が検出されたので、調査の少ない遺跡北半部には、弥生時代中期から後期の遺構が散漫に分布している可能性はある。その後、古墳時代はほとんど無く（上記のように13次は弥生後期、また19次の「古墳時代」竪穴建物は飛鳥時代末である）、飛鳥時代（九州須恵器編年Ⅳ期～Ⅵ期）の末期（Ⅵ期）から遺構が再び現れ、奈良時代前期から平安時代初期（８世紀前半～９世紀初頭）に遺構が増大する。2・3・5・6・8・14・18・20・23次などで多くにカマドを有する竪穴建物、あるいは掘立柱建物、井戸、土坑が検出されている。これらの分布の中心付近に7次の官衙遺構がある。また4・6次では平安時代前期（９～10世紀）の井戸や土坑があり、4次では緑釉陶器や縄目叩き文瓦が出土し、一般集落より上位の様相である。中世前半（12～14世紀前半）は少ないが、23・24次に遺構が若干見られる。その後、中世後半になり遺構が再び増大し、6・9・18・20次では同一の方形居館とみられる大規模な堀が検出されていて、24次ではその内部の区画溝や園池の可能性がある落ち込みが検出されている。1・16次でも中世後半の井戸や掘立柱建物群が多く検出されている。

その他、麦野Ａ遺跡から連続的に立地し、奈良時代前後に一連の大きな集落域となる麦野Ｂ・Ｃ、南八幡、雑餉隈、中ノ原からなる遺跡群の当該期の様相は、『南八幡遺跡群第８次調査』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第602集）、『中南部（８）』（同第867集）に詳しく、最新成果を含むまとめは『中ノ原遺跡』（同第1195集）にある。また、これら遺跡群の弥生時代遺構の展開については、『南八幡遺跡９』（同第1171集）に詳しく述べられているので参照願いたい。

Ⅱ．調査の記録

１．調査の概要

本報告の麦野Ａ22次調査は、遺跡が立地する段丘のほぼ中央部のうちやや北側の高所に位置している。調査地は、略南北に延びる段丘尾根頂部（現在はこの上を直線的に道路が走る）から僅かに東に下る地点にある。調査区の周囲標高は、西側で14.70ｍ、東側道路面で13.4ｍ（調査対象敷地東側は道路より一段高い）、調査区敷地はほぼ平坦である。盛土により逆に東側が僅かに高くなるが、遺構の遺存状況からは、調査区内においては南側前面道路の斜面ほどには傾斜していなかったと見られる。

発掘調査では、地表下の最も浅い西側で－20～30㎝、東側で－45～60㎝前後で鳥栖ローム上面となり、遺構を検出した。調査は敷地内での廃土処理の都合から、二区に分けている。

Ⅰ区（調査区西半）は、南側が道路までの駐車場切り下げがあり南北にやや長い。竪穴建物ＳＣ０１と柱穴若干を検出した。柱穴のうち３つは掘立柱建物を構成することが判明し、西側隣地の確認（試掘）調査により、柱列の延長を検出している。東西４間以上×南北１間以上であり、古代であろう。他にやや大きめの柱

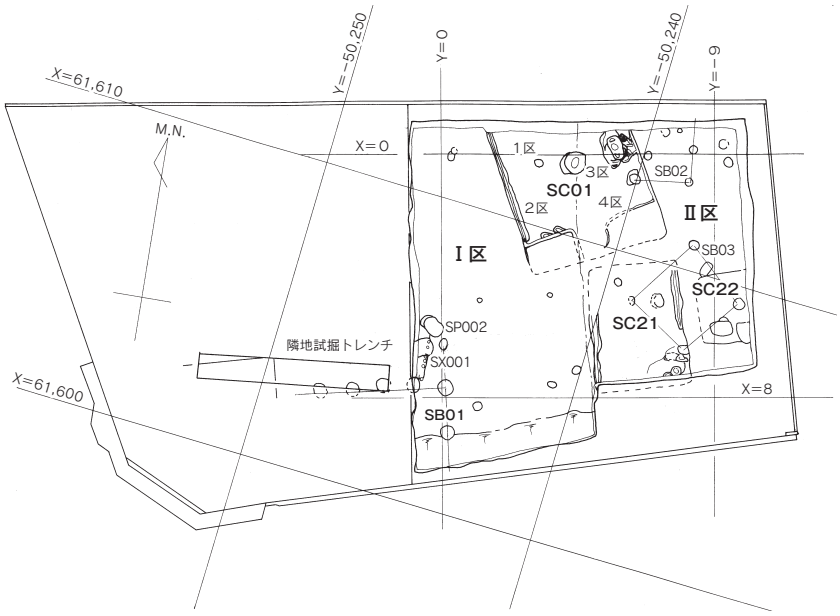


Fig. 3　調査区概要図と国土座標（1/250）

穴があり、須玖Ⅱ式前後の甕破片を出土した。ＳＣ０１は、反転後の調査区東半（Ⅱ区）に続く。攪乱が一部におよぶが、深さ50㎝近い残り部分もあり、比較的遺存が良い。東西4.7ｍ、南北推定6.4ｍ前後の長方形プランである。中央に土坑状の炉址があり、下層覆土に焼土粒とわずかな炭粒を含んでいた。 攪乱で残りが悪いが、南北の二隅に厚い貼床によるベッド状遺構がある。主柱穴が明確ではない。東半に土坑状落ち込みがあるが、対称位置に柱穴がなく、屋内土坑であろう。炉址、屋内土坑、ベッドの存在から住居でよいだろう。弥生時代後期前葉～中葉の土器片が多く出土し、また肌理の細かい研石が出土している。

Ⅱ区（調査区東半）は、ＳＣ０１東半分のほか、東西3.2ｍ×南北推定4.0ｍの長方形竪穴建物ＳＣ２１や、南北2.3～2.4ｍの小型正方形竪穴ＳＣ２２、柱穴若干を検出した。ＳＣ２１は、出土土器は奈良時代前半である。カマドが南東側にあり、隅角の可能性が高い。袖部は灰白色の粘土で構築され、その間に燃焼室があり床面がよく焼けていた。貼床はあるが薄い。東西辺に壁周溝がある。カマドの使用が明らかで住居であろう。ＳＣ２２は、カマドは不明だが、明確な貼床がある。一部、台状に高い床部があり、作業小屋であろうか。複数のピットが重複する。遺物が不明確だが、古代であろう。その他、柱穴（ピット）には、古代～中世までがあると思われる。

なお今回の調査期間中は、例年にない猛暑であり、作業効率が低下し、調査工程に影響するほどであった。予定の調査期間ギリギリで調査を終了している。また調査地内に水道がなかったため、猛暑でもあり撒き水や手洗い水など苦慮するところであったが、近くの公民館よりもらい水を受けることになり何とか凌げることになった。関係者の方に感謝申し上げるところである。

・調査区の基本土層について

調査区壁面土層はFig. 5に記した通りだが（各土層の位置はFig. 4）、簡潔に記すと、いずれも現在の地表面下にはごく近年の何層かの盛土があり、その下部にこれも近年の畠耕作土であろう旧表土層が

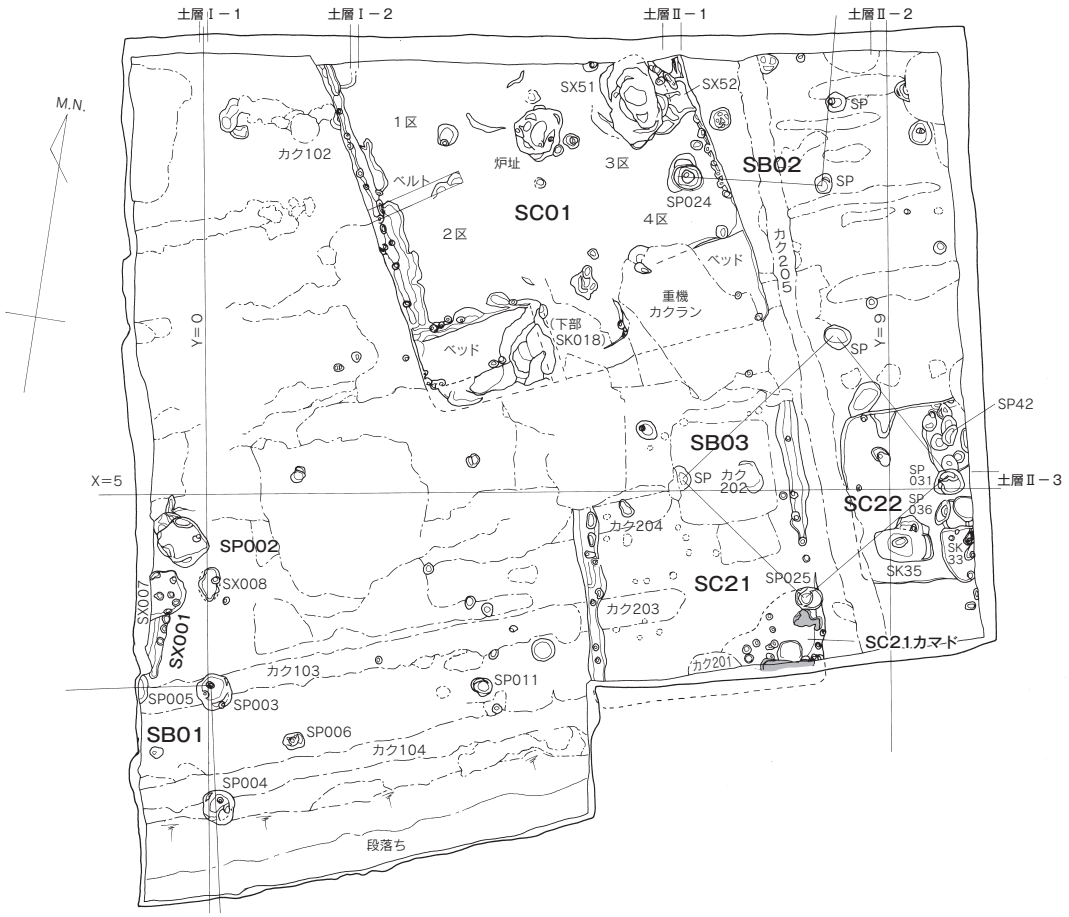
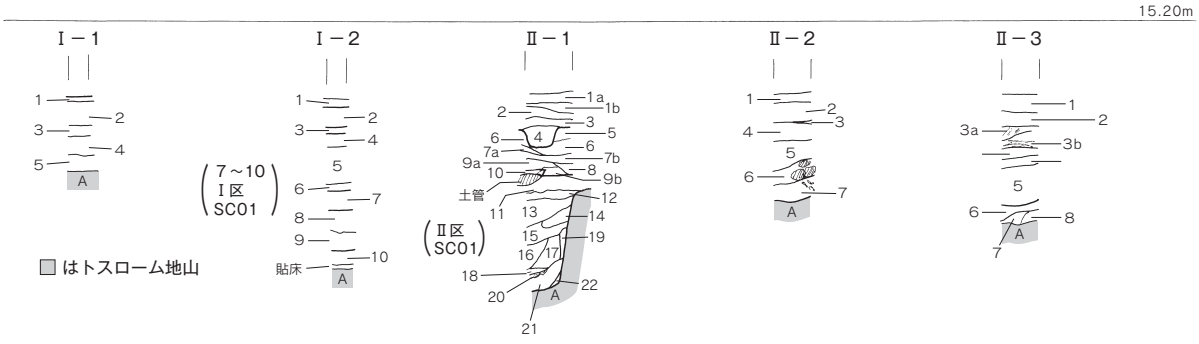


Fig. 4　調査区全体図（1/100）



（土層Ⅰ－1）

1．灰～淡青灰色真砂土，粗砂含む
2．浅黄橙色（淡ベージュ色）真砂土＋瓦礫含む
3．暗褐色シルト＋瓦礫多量，しまり甘
（1～3．盛土，4・5．旧耕作土）
4．暗褐灰～極暗灰褐色シルト＋レキ少＋瓦礫微量＋炭粒大含む，しまりやや有，旧耕作土（旧表土）か
5．にぶい黄橙～浅黄橙灰色（濃いベージュ色）土＋小レキ・砂・炭粒，旧耕作土下部か
A．鳥栖ローム（黄褐～橙色粘質土）地山

（土層Ⅰ－2）

1．Ⅰ－1と同じ
2．Ⅰ－1とほぼ同じ，瓦礫やや多
3．Ⅰ－1と同じ
（1～3．盛土，4～6．旧耕作土）
4．Ⅰ－1と同じ
5．にぶい灰黄褐色シルト，他はⅠ－1と同じ
6．暗褐色シルト＋5が上から浸み込む，混入物少，しまり有
（7～9．SC01覆土，10．貼床土）
7．暗褐色シルト＋ローム粒子やや多，しまりやや有
8．暗褐～極暗褐色土，しまり有，7より暗色
8 a．ローム粒子含む，やや暗色
8 b．ローム粒子・小ブロックやや多，やや明色
9．黒褐色シルト＋ローム粒子・小ブロック少，しまりやや有～やや甘，やや粘質
10．ローム土＋暗褐色土少，しまり有，粘性有，貼床土

（土層Ⅱ－1）

1．灰白色マサ土＋バラス～灰色バラスマサ土
2．浅黄橙～黄色マサ土
3．褐色シルト＋ロームブロック＜20㎜多
4．瓦礫ブロック主体＋褐灰シルト＋マサ土
5．灰褐～褐色シルト＋炭粒
6．褐～灰褐色シルト＋ローム＜8㎜＋炭粒
7 a．灰色マサ土＋浅黄褐色マサ土少
7 b．灰白色マサ土
8．黄褐色マサ土＋褐色土
9．褐色土＋褐灰色シルト＋砂レキ多＋マサ土多
10．土管埋置カクラン、9層入
（1～10．盛土）
11．褐灰色シルト＋砂レキ少＋炭微量、旧表土
（12～22．SC01覆土）
12．極暗褐～暗褐色シルト＋砂レキ＋土（11層）から褐灰色シルト影響、竪穴最上層落ち込み（包含層状）
13．極暗褐色土シルト＋ローム＜10㎜ 5%
14．極暗褐色土（やや粘質）シルト＋ローム＜8㎜ 10%
15．黒褐色土（やや粘質）シルト＋ローム粒子少
16．黒褐色（やや粘質）シルト＋ローム粒子少
17．黒褐色シルト（やや粘）＋ローム＜8㎜ 10%
18．ローム橙褐色＋極暗褐色土 40%
19．黒褐色土（やや粘質）シルト
20．黒色土
21．ローム橙褐色土＋暗褐色土汚れ少，貼床土
22．ローム橙褐色土崩落土

（土層Ⅱ－2）

1．灰～灰白色＋マサ土＋バラス
2．浅橙色マサ土
3．暗褐色シルト＋黄色マサ土＋砂レキ＋ロームブロック＜10㎜少
4．褐灰～灰褐色シルト＋砂レキ少
5．にぶい褐灰～にぶい灰褐色（少し赤味ある色）シルト＋砂レキ＋橙褐色ロームブロック＜10㎜ 10%
6．灰褐（～褐灰）色～にぶい褐灰色シルト＋ローム＜8㎜φ以下やや多＋灰色シルト状ブロック少
（1～6．最近の盛土）
7．褐灰色シルト（上の盛土より灰色気味＋砂レキ、ビニル袋片含む現代の旧表土

（土層Ⅱ－3）

1．灰～灰白色マサ土＋バラス
2．浅橙色（ベージュ色）マサ土
3．灰褐色シルト＋浅赤橙色マサ土多
4．褐色シルト＋炭粒大混入＋レキ少，（下部）黄～黄褐色ロームブロック（八女粘土上部含む）＋黄色マサ土
5．灰褐（～褐灰）色シルト＋砂レキ少＋炭微量
（1～5．近年の盛土）
（6～8．竪穴SC21覆土）
6．暗褐色土＋ローム粒子・小塊＋極暗褐色土＜20㎜少
7．ローム橙褐色土ブロック状＋暗褐色土 25%
8．ローム橙褐色土＋暗褐色汚れ 10%，貼床土

0　10cm

Fig. 5　調査区壁面土層図（1/40）

あり、その下部は一次的な包含層などを挟まずに鳥栖ローム上面となる（Ph. 1）。この上面で遺構を検出したが、当然に遺構の時期の地表層は削平を受けていることになる。

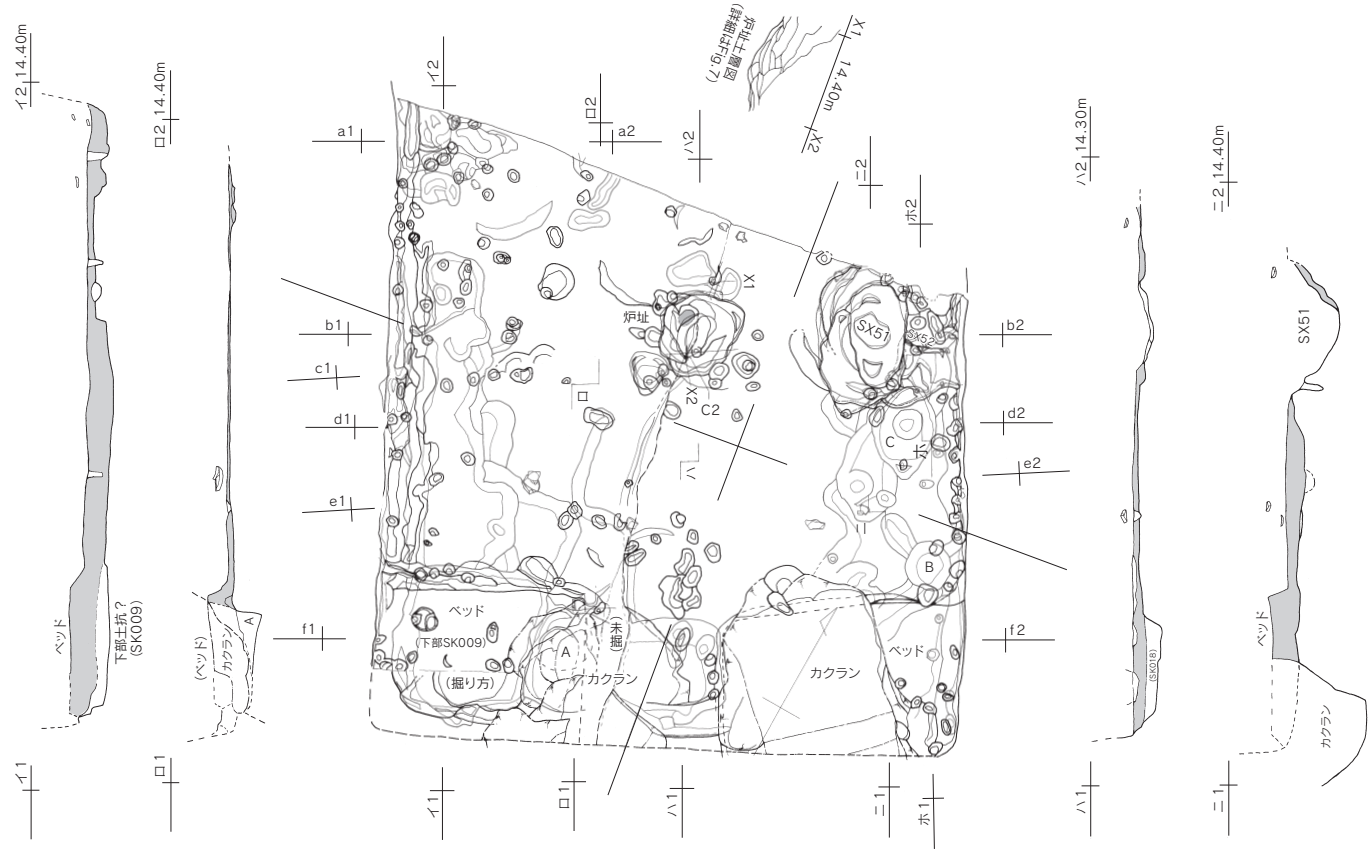
Ph.1 調査区壁面土層Ⅱ－1

2．検出遺構

（1）竪穴建物（竪穴住居；ＳＣ）

・ＳＣ０１（Fig. 6、PL. 1－2～5、PL. 2、PL. 3－1～3）

竪穴建物ＳＣ０１は、Ⅰ区とⅡ区にまたがり検出されたが、反転調査区境界部分で、わずかに調査できなかった部分がある。遺構の覆土は極暗褐色～黒褐色土で明瞭であった（PL.1 － 2）。「竪穴建物」とするが、規模も十分で、炉址があり、貼床があり、隅にベッド状遺構があり、廃絶時に壊れた土器破片を廃棄し、生活痕跡があり「竪穴住居」としてよい。竪穴住居の規模とプランは、北側が調査区外だが、南北 5.2 m以上×東西 4.6 mである。炉址を中央として反転すると長軸は約 6.6 mの長方形住居となる。方位は長軸がN（磁北）－ 30°－Wである。床面は全体的に貼床があり（中央は薄い）、後述するが四周の貼床は厚い。壁際西辺は壁周溝（＋小ピット？）があり、東辺は小ピット列がある。ベッド状遺構が南西隅と南東隅にあるが、いずれも盛土（貼床）による構築である（断面図およびPL. 2 － 5～7参照）。他の床面より 15cm 前後高い。おそらく北側両隅にもあるだろう。竪穴掘り方は凹凸があるが、中央を除くほぼ四周が周溝状となるタイプである（PL. 2 － 2,4、PL. 3 － 4）。「ベッド」は、一部撹乱で不明な部



（Ⅱ区ＳＣ０１東西土層注記：Fig. 7から続き）

39 B．暗褐（～にぶい褐）色土＋にぶい暗橙褐色土30％＋（橙～）橙褐色ローム土塊＜50×35㎜35％＋炭粒ごく微量，全体に明色，しまりやや有～やや甘

40．橙褐色ローム主体＋暗褐～極暗褐色土30％，しまり有

41．暗褐～にぶい暗橙褐色土＋橙色（～橙褐）色ローム＜20㎜以下20％＋黒褐色土塊下半に多（下の48？），しまりやや甘

（44・45・47．下層01）

44．極暗褐色土＋橙色ローム粒子少，しまりやや有～やや甘，やや粘質

45．44とほぼ同じ，しまりやや甘

47．極暗褐色（～西側一部暗褐～暗赤茶褐色気味）土＋橙褐色ローム＜8㎜5％＋下部層界に炭化物，しまりやや有（～やや甘，東側一部しまり有），やや粘質，

（46．下層02）

46．極暗褐色土＋橙褐色ローム粒子5％以下＋赤褐～黄橙色焼土粒＜5㎜5％＋炭粒ごく微量，しまり有かたい

（51～54．下層03）

51．黒褐（～黒）色土＋橙褐色ローム土＜8㎜7％，しまりやや有～有

52．（黒～）黒褐色土＋橙色ローム小塊・粒子＜10㎜10％，しまり有

53．黒褐～極暗褐色土＋橙褐色ローム粒子＜5㎜5％まで＋ローム小塊＜10㎜小塊微量，粘性やや有

54．極暗褐色土＋ローム粒子5％，しまり甘

（48～50・55・56．下層04）

48．黒褐色（～黒色）シルト　しまりあり　20×10ミリ以下ローム小塊・粒子（橙色）5％以下

49．黒褐色土シルト＋極暗褐色土30％～40％　しまりややあり～しまりあり
＋ローム小塊40×30ミリゅあり　10ミリ以下ローム5～10％　焼土粒わずか

50 B．黒褐～極暗褐色シルト　しまりややあり～やや甘い　ローム粒子少し

55．黒色（～黒褐色）シルト　しまりあり　もっとも黒い　極暗褐色土ブロック混入5％　ローム10ミリ以下小塊・粒子5％以下　粘性少しあり

56．橙色～橙褐色土ローム地山崩れ＋暗褐～極暗褐色土斑状40％　しまりややあり　粘性　ややあり

（57～63．最下層地山崩落ないし貼床）

57．橙色ローム＋暗褐色土汚れ25％，粘性有，しまり有

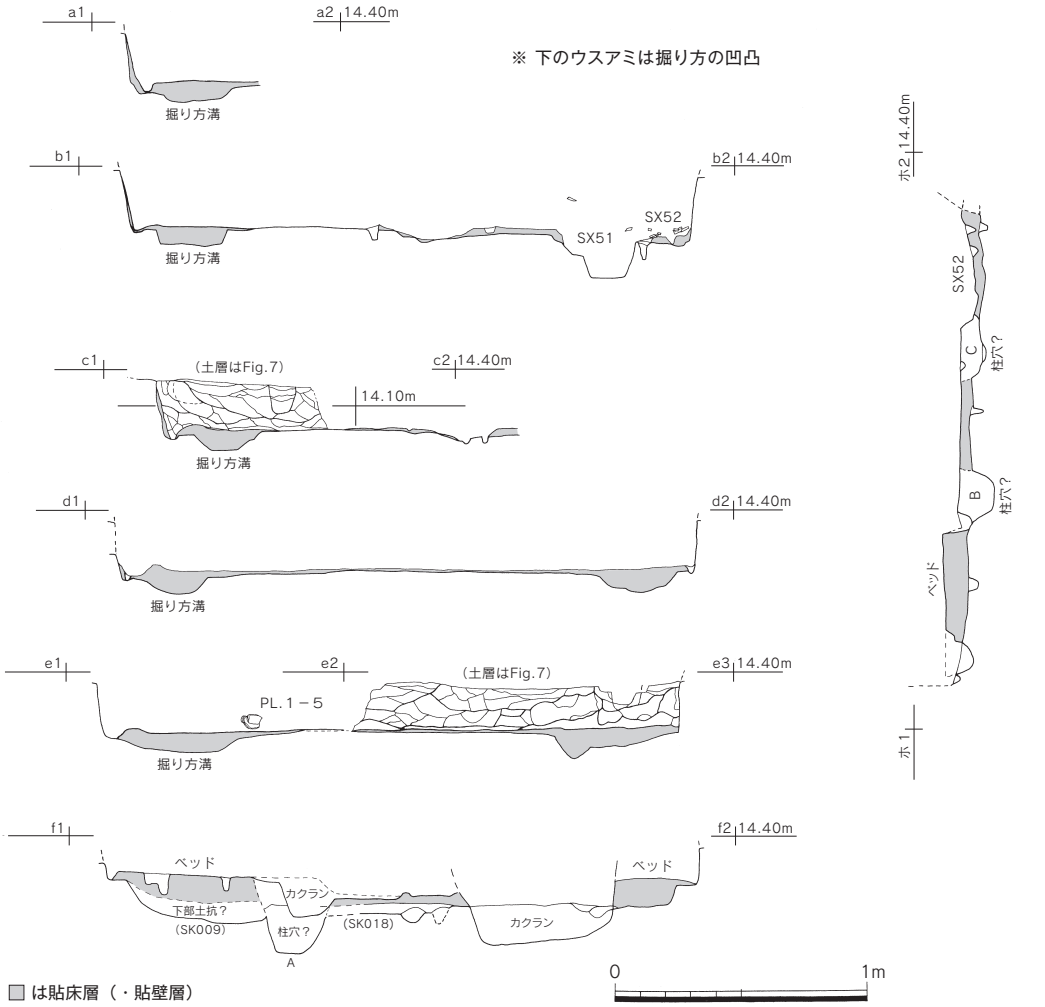
58．暗褐～極暗褐色土＋橙褐色ローム30％粘

59・60．橙色ローム粘質土＋極暗褐～暗褐色土25％，しまり有

61．橙色ローム土＋暗褐色土少，しまり有

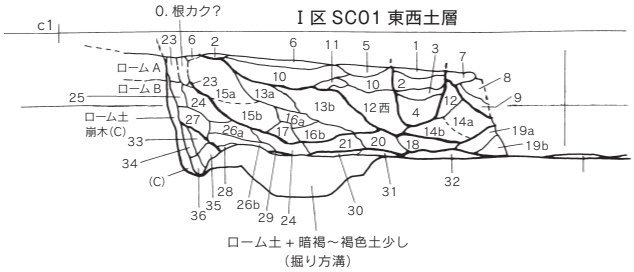
62．橙色ローム土＋汚れ少，しまり有かたい

63．橙色ローム土＋暗褐色土20％，しまり有



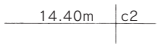
■ は貼床層（・貼壁層）

Fig. 6　SC01 実測図（1/60）



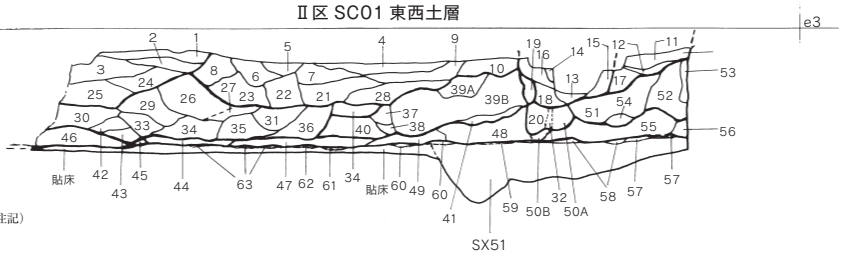
（Ⅰ区ＳＣ０１東西土層注記）

ロームＡ．橙褐～にぶい橙色土，乾燥するとパサパサ
ロームＢ．（やや明）橙褐～橙色ローム土，感想しても粘性保つ
0．極褐色～暗褐色シルト，しまりやや甘，上から？（根カクラン？）
（1～4．上からの柱穴ピットか）
1．極暗褐色シルト，しまりやや甘，　ローム＜10㎜やや多
2．暗褐色土（1より明色）、しまり有
3．極暗褐色土＋橙～にぶい（橙）褐色ローム土塊 40%，しまりやや有
（4以下，本ページ下半）



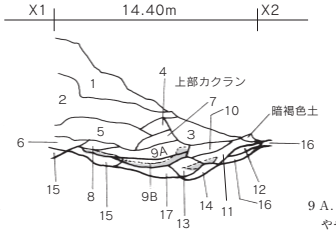
（Ⅱ区ＳＣ０１東西土層注記；下段から続く）

30．暗褐（～極暗褐）色土＋橙～橙褐色ローム＜15㎜ 12%（東側下部集中），しまり有
31．極暗褐色土＋橙褐色ローム土小塊・粒子＜12㎜ 15%＋炭粒微量，しまり（やや）有
33．暗褐～極暗褐色土＋橙～橙褐色ローム＜8㎜ 7%，しまりやや甘
34．極暗褐色土＋橙～橙褐色ローム粒子＜8㎜ 7%，しまりやや有～やや甘
35．極暗褐（～暗褐）色土＋橙褐色ローム小塊・粒子＜30㎜ 7%，しまり有～やや有
36．極暗褐色（～暗褐色）シルト　しまりややあり～やや甘い　橙褐色ローム 10 ミリ以下　小塊，粒子　5～10%　炭粒極わずか
42．極暗褐色土＋橙色ローム土＜8㎜ 7%，焼土ごく微量，しまりやや有
43．極暗褐色土＋橙色ローム粒子 10%，しまりやや甘　（37～41．中層 02＝下層上部 02）
37．（暗褐～）極暗褐色土，しまりやや甘
38．極暗褐色土＋にぶい橙～橙褐色ローム小塊・粒子＜10㎜ 5%，しまり甘～やや甘
39 A．暗褐色土＋にぶい褐色土 30%，しまりやや甘
（→ Fig. 6 左側に続く）



（Ⅱ区ＳＣ０１東西土層注記）

※注記内容簡略化
（凡例：＜○㎜＝径○㎜以下）
（1～3・24・25．上層 01）
1．極暗褐色土（～乾くと暗褐色土）
2．極暗褐色土（～乾くと暗褐色土）＋橙褐色ローム小塊・粒子＜15 ミリ 10%以下
3．極暗褐色土＋橙～橙褐色ローム土塊 10%以下（50×35 ミリ大あり），しまりやや有
24．極暗褐色土，しまりやや甘，25 に漸移
25．極暗褐（～暗褐）色土＋にぶい褐色シルト（しまり甘）大土塊＋橙褐（～橙）色ローム＜10㎜ 10%，しまりやや有（～やや甘）
（4～10・21～23・28．上層 02）
4．暗褐～暗褐色土＋橙褐色ローム＜25㎜小塊・粒子 5%，しまりやや有～やや甘
5．4とほぼ同じ＋ローム＜15㎜ 10%
6．極暗褐色土＋橙～橙褐色ローム＜20㎜ 20%，しまりやや有
7．極暗褐（～暗褐）色土＋橙褐色ローム＜50×25㎜ 20%，しまりやや有～やや甘
8．極暗褐色土＋橙褐色ローム＜10㎜ 15%
9．極暗褐～暗褐色土＋にぶい橙～橙褐色ローム＜20㎜ 20%，しまりやや甘
10．暗褐～極暗褐色土シルト＋橙褐～にぶい橙色ローム小塊＜15㎜ 10%以下
21．極暗褐～暗褐色土(22 よりやや明色)＋　橙褐～にぶい橙色ローム小塊＜20㎜ 25%，しまり有～やや有（22 とほぼ同じ）
22．極暗褐色土＋橙褐色ローム小塊＜25㎜ 17%，しまりやや有（～有）
23．極暗褐色土＋ローム粒子＜5㎜ 10%，しまりやや有（21 よりやや甘）
28．暗褐色土＋暗橙褐色土 25%＋橙～橙褐色ローム＜15㎜ 10%，しまり有（～やや有）
（11・12・17．上層 03）
11．暗褐色土+ローム粒子少，しまり甘
12．極暗褐（～暗褐）色土＋ローム粒子 5%，しまりやや有～やや甘
17．極暗褐色土＋暗褐色土少＋黒褐色土少＋ローム粒子＜5㎜ 5%，しまりやや有
（13～16・18～20・32？・50 A?．ピットか）
13．黒褐色土＋ローム小塊＜10㎜少・粒子＜5㎜ 10%，しまりやや有，上部ピット柱痕？
14．極暗褐色土＋ローム粒子＜5㎜少，しまり甘～やや甘
15．にぶい褐～にぶい橙褐色土＋極暗褐色土塊 20%＋ローム粒子 5%，しまり有
16．極暗褐（～暗褐）色土＋黒褐色土 20%＋橙～橙褐色ローム小塊・粒子＜30×20㎜ 20%，しまり甘
18．極暗褐～暗褐色土（16 より暗褐色に近い）＋橙褐色ローム小塊・粒子＜25㎜ 30%，しまりやや甘～やや有（16 よりしまる）
19．極暗褐色土＋橙色ローム＜7㎜ 7%，しまりやや甘（しまり 18＞19＞16）
20．極暗褐色土＋暗褐色土 20%＋ローム粒子＜5㎜ 5%，しまりやや有，9 よりやや暗色，下部柱穴柱痕の可能性，植物根の影響？
32．極暗褐色土＋黒色土少＋ローム粒子少，しまり甘，20 と 50 A の間（植物根の影響？）
50 A．黒褐～極暗褐色土＋橙色ローム粒子＜10㎜ 15%，しまり有～やや有，竪穴覆土？
（26・27・29～31・33～36・42・43．中層 01＝下層上部 01）
26．極暗褐色土シルト＋橙褐色ローム小塊＜10㎜ 10%弱，しまりやや甘～やや有（しまり 29＜26＜27）
27．極暗褐色土＋橙色ローム＜10㎜ 15%，しまり有～やや有
29．極暗褐～暗褐色土＋黒色有機質土粒・炭粒＜5㎜ごく微量＋橙（～橙褐）色ローム小塊＜20㎜ 20%，しまりやや甘
（上段に続く）



■ は焼土混入

（ＳＣ０１炉址土層注記）

1．暗橙褐～暗灰褐色シルト＋ローム土塊・粒子＜10㎜ 10%，一部褐灰色土＋灰褐色シルト，2層に近いが乾くと固まり灰褐色土化，しまりやや甘
2．暗褐色土＋橙褐色ローム土塊・粒子＜35㎜ 20%，乾くと固まる，しまり有，粘性欠
3．（黒褐～）極暗褐色シルト＋ローム粒子＜5㎜ 5%以下，しまりやや甘，粘性弱～少
4．暗褐～極暗褐色土＋橙褐色ローム土塊＜25㎜ 12%，しまりふつう，粘性わずか
5．極暗褐～暗褐色土＋橙褐色ローム土塊・粒子＜15㎜ 20%，しまりやや有～有，粘性わずか
6．黒～黒褐色（やや粘質）シルト＋ローム粒子少，しまりやや有（～やや甘），粘性やや有
7．極暗褐色土，シルト土　ローム粒子含むがわずか　しまりやや甘い
8．暗褐（～極暗褐）色粘質シルト＋橙褐色ローム土塊＜8㎜ 15%，しまり有，粘性有
9 A．極暗褐色シルト＋ローム粒子少～微量，しまりやや有，粘性わずか
9 B．暗褐（～暗褐）色シルト＋焼土粒＜3㎜やや多～若干＋炭粒少＋ローム粒子少，9 Aよりやや明色，しまりやや有（しまり 9 B＞9 A，9≒10＞13），
10．黒褐～極暗褐色土＋ローム粒子微量，混入物少，しまりやや甘
11．黒褐色土＋ローム粒子＜3㎜ 10%＋焼土粒少＋炭粒微量，しまりやや有，粘性弱
12．黒褐色シルト＋暗褐（～暗橙褐色）土塊･橙褐色ローム＜5㎜ 30～40%・焼土粒微量，　しま有（11 よりしまる），粘性やや有
13．極暗褐（～暗褐）色シルト＋ローム粒子＜3㎜少＋焼土粒＜5㎜少～若干＋炭粒微量，しまりやや甘～やや有，粘性わずか
14．ややにぶい橙褐色土＋暗褐色土 25%斑状，トスローム崩落土がシルト状に固まった層，粘性少，しまりやや有（14＞15＞16）
15．橙褐色トスローム土＋暗褐色土 20%まで斑状，しまりやや有，粘性強，貼床層 1
16．明橙褐色トスローム土＋暗褐色土少～微量，しまり有かたい，粘性有，貼床層 2

Fig. 7　SC01 土層図（1/30）

（Ⅰ区ＳＣ０１東西土層注記・続き）

4．極暗褐色シルト，しまりやや甘（1より有），ローム土少塊少・粒子多
5．暗褐色～暗灰褐色シルト，しまり甘，ローム粒子＜5㎜以下少
6．極暗褐～暗褐色シルト，しまりやや甘～甘，ローム粒子＜10㎜多，5より暗色
7．極暗褐～暗褐色シルト＋ローム粒子＜5㎜少，しまりやや甘～やや有
8．極暗褐色シルト＋ローム土塊＜40㎜少・＜10㎜少塊多，しまりやや有
9．橙褐色ローム土塊 70%＋（極）暗褐色シルト，しまりやや有～やや甘
10．暗褐色土～8層極暗褐色シルト，しまりやや有～有，橙褐色ローム小塊・粒子斑状 10%
11．黒褐～極暗褐色シルト＋ローム＜2㎜少，しまりやや有，粘性少
12 西．極暗褐色土（10 層より暗色，11 層より明色）＋にぶい褐色ローム＜10 ミリ小塊･粒子 5%，しまりやや有～有，粘性若干
12 東．12 西層よりローム粒子やや多
13 a．極暗褐色～下半暗褐色土漸移）シルト＋ローム粒子・小塊＜5㎜ミリ 20%，しまりややあり
13 b．極暗褐～暗褐色土斑状＋ローム小塊＜12㎜ミリ 20%以下（13 a より大），粘性少，しまり 13 a より有
14 a．極暗褐色土（12 よりやや暗色）＋ローム橙色土＜10㎜小塊・粒子 10%，しまりやや有、粘性若干
14 b．（極暗褐～）暗褐色土＋橙～にぶい橙褐色ローム土塊＜20㎜・粒子 25%，しまりやや甘，粘性やや有
15 a．（やや明色）暗褐色土＋ローム小塊・粒子＜10㎜ 10%
15 b．（やや明色）暗褐色土橙褐色ローム小塊＜15㎜ミリ 5%＋ローム粒子＜5㎜ 10%（5 a 層より多）
16 a．（13 より明色）極暗褐～暗褐色シルト＋ローム粒子少，しまりやや有，粘性少
16 b．（極暗褐～）暗褐色シルト＋ローム小塊・粒子＜16 ミリ㎜ 20%，しまりやや有～やや甘，粘性若干
17．極暗褐色シルト＋にぶい褐色土塊＜25㎜少，粘性少，しまりやや有
18．極暗褐（～暗褐）色土＋橙～橙褐色ローム土小塊・粒子＜15㎜やや多 20%，粘性若干，しまりやや有
19 a．極暗褐色シルト＋にぶい橙褐色ローム小塊＜10㎜ 12%，粘性弱（パサパサする），しまりやや有
19 b．極暗褐色土（19 a 層より暗色）＋橙褐～にぶい橙色ローム土＜5㎜ 5～10%，しまりあり，粘性少～若干
20．暗褐色土＋にぶい橙褐色ローム土塊＜25㎜ 10%＋橙色ローム粒子＜5㎜ 10%
21．極暗褐色土（18 層より黒い）＋橙色ローム粒子＜5㎜ 7%，しまりやや有～やや甘，粘性若干
22．暗褐色土＋黒褐色土少（21 層より黒い）＋橙色ローム粒子＜5㎜ 7%，しまりやや有～有，粘性やや有
23．褐色シルト質土＋暗灰褐色シルト＋ローム橙色土粒子＜5㎜ 10%，しまり有～やや有，粘性わずか
24．暗褐色土（25 より明色）＋ローム粒子＜7㎜ 25%，しまり有，粘性少
25．暗褐色土＋にぶい橙色ローム小塊＜10㎜ 5%，しまりやや有～有，粘性若干 26．黒褐色シルト＋にぶい褐色ローム粒子＜5㎜ 7%以下，しまり有，粘性若干（26 上＝黒色土～26 下＝極暗褐色土＋ローム土塊＜20㎜やや多）
27．極暗褐色シルト＋ローム粒子＜5㎜ 10%，しまり有，粘性若干
28．黒褐～極暗褐色（やや粘質）土＋明橙色ローム土＜5㎜以下 20%
29．明橙色ローム土＋極暗褐色土しみ状（斑状）混入少，貼床層
30．（黒褐～）極暗褐色粘質土＋ローム粒子＜3㎜少，しまりやや甘（～やあり）
31．暗褐（～極暗褐）色土＋にぶい褐（～橙褐）色ローム土しみ状 25%，しまりやや有，粘性有，
32．極暗褐～暗褐色土＋橙褐色ローム粒子＜5㎜ミリ 15%，しまりやや有～有，粘性有，31 層よりやや暗色
33．極暗褐～黒暗褐色シルト，ローム粒子少，しまりやや甘
34．極暗褐色土と暗褐色土＋ローム橙褐色土の互層＋ローム小塊・粒子斑状 30%強，しまりやや有、粘性若干
35 a．極暗褐(～一部黒褐)色シルト+ローム粒子少，粘性少，しまりやや有～やや甘
35 b．極暗褐～黒褐色シルト＋ローム土粒子＜5㎜ 5%（35 a 層より多），粘性若干，しまりやや甘
36．（ややにぶく暗い）橙褐色ローム土塊土体＋極暗褐色土塊 30%，しまりやや甘，粘性やや有
37．明橙褐～橙色，トスローム表面硬くしまり上部覆土が分離しやすい，褐色気味の「シミ」が多く貼床層か

分もあるが、南東部が 110cm 前後× 180㎝、南西部が 165㎝× 115㎝に復元され、人の「寝床」になりうるものである。なお床面には多くの小穴があったが(PL. 2 － 1,2､PL. 3 － 1)、大半が植物根などの動植物生痕であろう。ただし、壁面沿いのものや、壁方向に直交して並ぶものなど、杭痕跡の可能性があるものは記録している。また南西隅ベッド下部に、竪穴掘り方とは異なる一辺 110cm の略方形の土坑（**SK009**）を検出した。時期不明だが弥生時代の範囲だろう。中央部で炉址の小土坑を検出した（PL. 2 － 1）。浅い円形土坑に焼土が溜まるという典型的なものだが、激しい焼土はなく、底面に焼土が残る程度である。ただし最底面とやや浮いた２層の焼土層があ

り、一度作り直されている可能性もある。Ⅱ区（東半）東辺中央には、**屋内土坑 SX051** がある（PL. 3 − 1,3）。壁際の浅い凹み（**SX052**）と中央寄りの大きな土坑（**SK051**）は分けて把握すべきかもしれない。前者は床直遺物が周囲床面から SX052 の凹みに落ち込み、床面の凹みと認められるが、後者は当初は中央がピット状に捉えられ、その周囲に大きな掘り方があったもので、おそらく出入口施設（梯子）などを設置し掘り方を埋め、住居廃絶時にはそれを抜き取ったものと解釈できる。**SK（SX）051** は、上部が約 120 × 65cmの掘り方、推定柱抜跡の中央楕円形ピットは 80 × 40cm、深さは床面から 45cm。

この竪穴建物には**主柱（穴）がない。**ただしⅠ区南西ベッド東側下部の凹み（**柱穴？A**）と、南東隅から 150cm の掘り方東辺にやや深くなる凹み（**柱穴？B**）がある。これに対称的な位置の北半部に同様の凹みがあれば、変則的な主柱配置になる可能性もある。これらの状況は、弥生時代後期の北部九州における二本主柱両側ベッド付竪

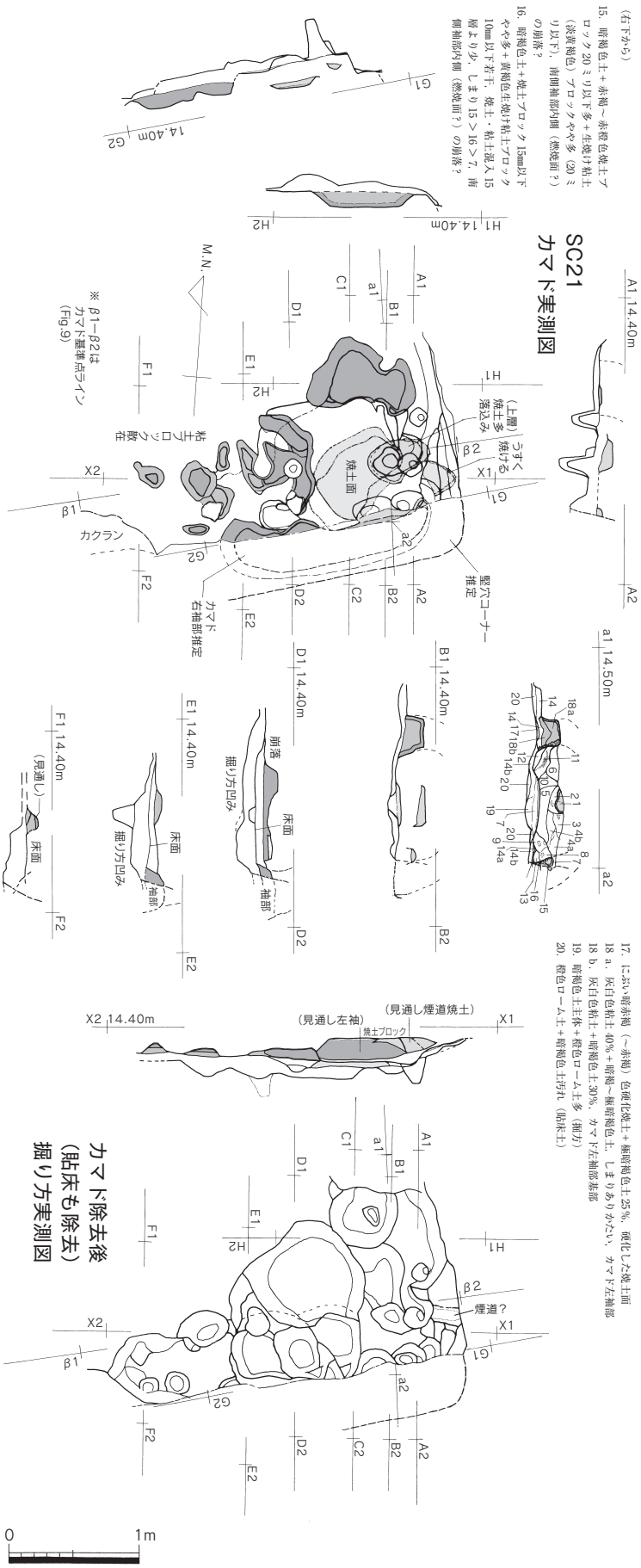
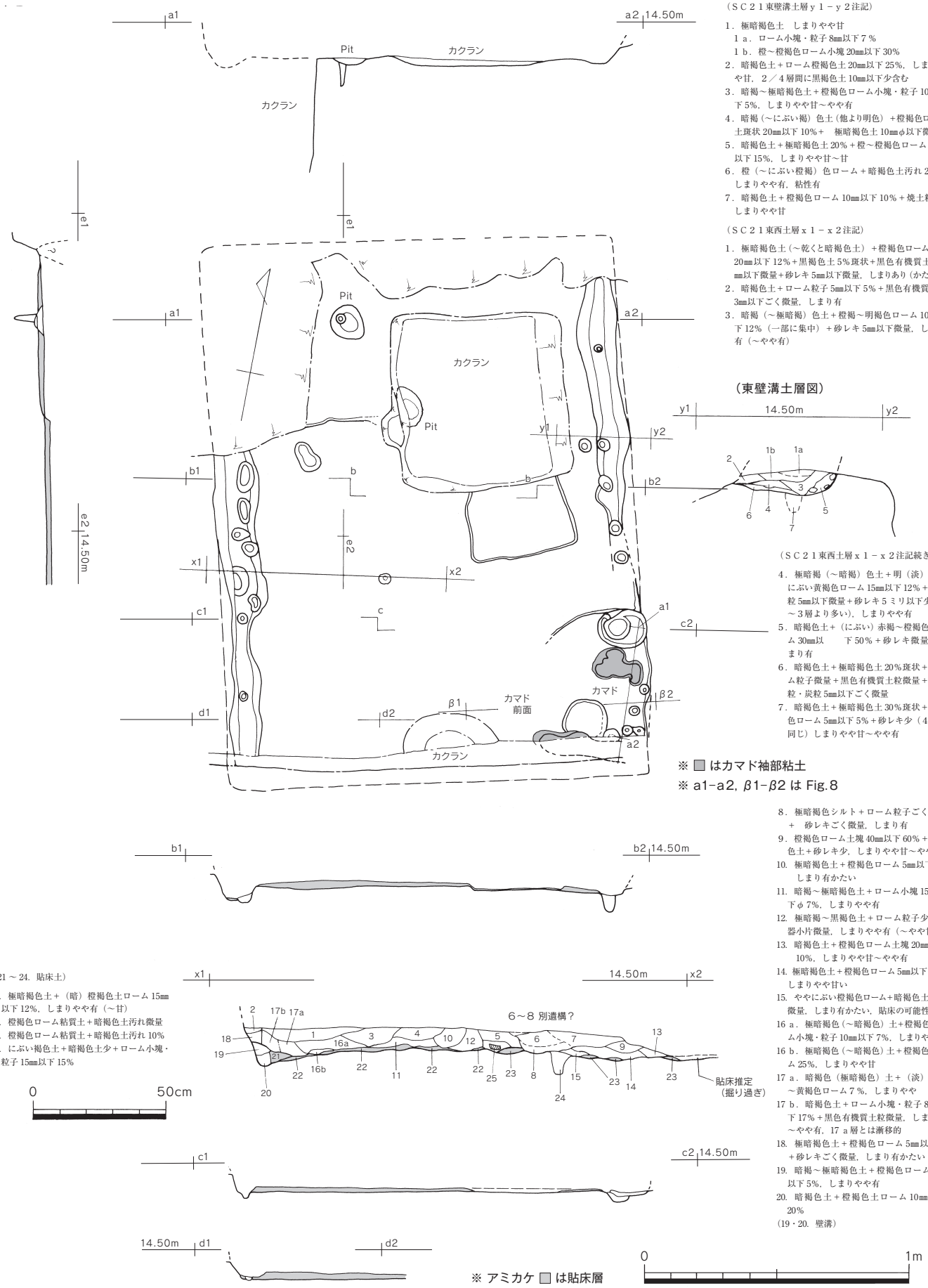


Fig. 8　SC21 カマド実測図（1/25）



（ＳＣ２１東壁溝土層ｙ１－ｙ２注記）

1．極暗褐色土　しまりやや甘
　１ａ．ローム小塊・粒子 8㎜以下７％
　１ｂ．橙～橙褐色ローム小塊 20㎜以下 30％
2．暗褐色土＋ローム橙褐色土 20㎜以下 25％，しまりやや甘，２／４層間に黒褐色土 10㎜以下少含む
3．暗褐～極暗褐色土＋橙褐色ローム小塊・粒子 10㎜以下 5％，しまりやや甘～やや有
4．暗褐（～にぶい褐）色土（他より明色）＋橙褐色ローム土斑状 20㎜以下 10％＋　極暗褐色土 10㎜φ以下微量
5．暗褐色土＋極暗褐色土 20％＋橙～橙褐色ローム 20㎜以下 15％，しまりやや甘～甘
6．橙（～にぶい橙褐）色ローム＋暗褐色土汚れ 20％，しまりやや有，粘性有
7．暗褐色土＋橙褐色ローム 10㎜以下 10％＋焼土粒少，しまりやや甘

（ＳＣ２１東西土層ｘ１－ｘ２注記）

1．極暗褐色土（～乾くと暗褐色土）＋橙褐色ローム土塊 20㎜以下 12％＋黒褐色土 5％斑状＋黒色有機質土状 5㎜以下微量＋砂レキ 5㎜以下微量，しまりあり（かたい）
2．暗褐色土＋ローム粒子 5㎜以下 5％＋黒色有機質土粒 3㎜以下ごく微量，しまり有
3．暗褐（～極暗褐）色土＋橙褐～明褐色ローム 10㎜以下 12％（一部に集中）＋砂レキ 5㎜以下微量，しまり有（～やや有）

（ＳＣ２１東西土層ｘ１－ｘ２注記続き）

4．極暗褐（～暗褐）色土＋明（淡）褐～にぶい黄褐色ローム 15㎜以下 12％＋焼土粒 5㎜以下微量＋砂レキ５ミリ以下少（１～３層より多い），しまりやや有
5．暗褐色土＋（にぶい）赤褐～橙褐色ローム 30㎜以　　下 50％＋砂レキ微量，しまり有
6．暗褐色土＋極暗褐色土 20％斑状＋ローム粒子微量＋黒色有機質土粒微量＋焼土粒・炭粒 5㎜以下ごく微量
7．暗褐色土＋極暗褐色土 30％斑状＋橙褐色ローム 5㎜以下 5％＋砂レキ少（４層と同じ）しまりやや甘～やや有
8．極暗褐色シルト＋ローム粒子ごく微量＋　砂レキごく微量，しまり有
9．橙褐色ローム土塊 40㎜以下 60％＋暗褐色土＋砂レキ少，しまりやや甘～やや有
10．極暗褐色土＋橙褐色ローム 5㎜以下少，しまり有かたい
11．暗褐～極暗褐色土＋ローム小塊 15㎜以下φ 7％，しまりやや有
12．極暗褐～黒褐色土＋ローム粒子少＋土器小片微量，しまりやや有（～やや甘）
13．暗褐色土＋橙褐色ローム土塊 20㎜以下 10％，しまりやや甘～やや有
14．極暗褐色土＋橙褐色ローム 5㎜以下 5％，しまりやや甘い
15．ややにぶい橙褐色ローム＋暗褐色土汚れ微量，しまり有かたい，貼床の可能性も
16 a．極暗褐色（～暗褐色）土＋橙褐色ローム小塊・粒子 10㎜以下 7％，しまりやや有
16 b．極暗褐色（～暗褐色）土＋橙褐色ローム 25％，しまりやや甘
17 a．暗褐色（極暗褐色）土＋（淡）橙褐～黄褐色ローム７％，しまりやや
17 b．暗褐色土＋ローム小塊・粒子 8㎜以下 17％＋黒色有機質土粒微量，しまり有～やや有，17 a 層とは漸移的
18．極暗褐色土＋橙褐色ローム 5㎜以下少＋砂レキごく微量，しまり有かたい
19．暗褐～極暗褐色土＋橙褐色ローム 5㎜以下 5％，しまりやや有
20．暗褐色土＋橙褐色土ローム 10㎜以下 20％
（19・20．壁溝）

（21 ～ 24．貼床土）

21．極暗褐色土＋（暗）橙褐色土ローム 15㎜以下 12％，しまりやや有（～甘）
22．橙褐色ローム粘質土＋暗褐色土汚れ微量
23．橙褐色ローム粘質土＋暗褐色土汚れ 10％
24．にぶい褐色土＋暗褐色土少＋ローム小塊・粒子 15㎜以下 15％

Fig. 9　SC21 実測図（1/40, 土層図は 1/20）

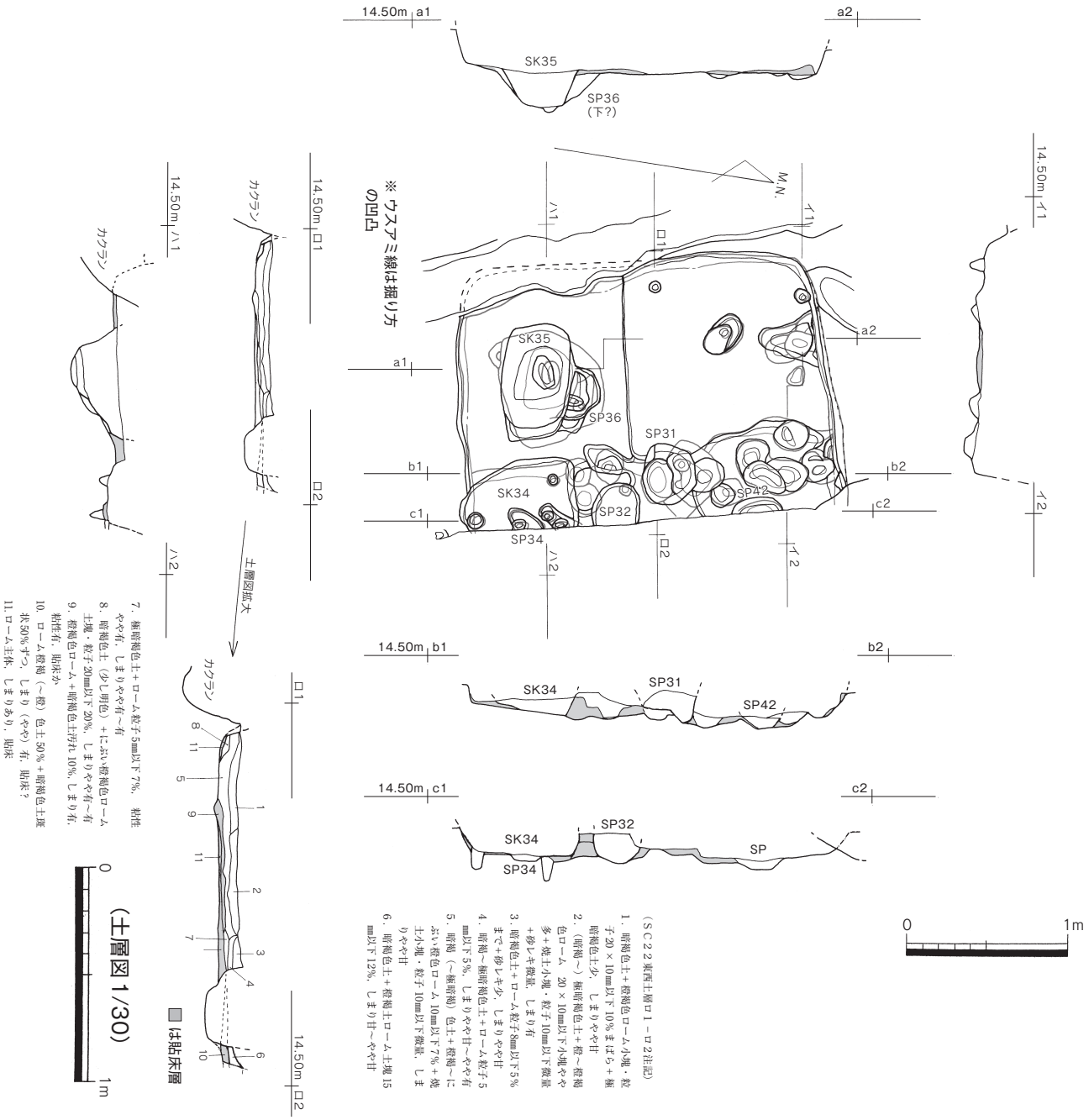


Fig.10　SC22 実測図（1/40, 土層図は 1/30）

穴建物の成立過程での試行錯誤段階の一様態であろう。

竪穴住居の横断土層（Fig. 7、PL. 1 － 3、PL. 3 － 2）は一見レンズ状の堆積大別に見えるが、その中に地山ブロックを多く含む小層単位が多数あり、その傾きも一定ではない。つまりこの住居は廃絶時にある程度埋め戻されたと観察される。したがって、厳密な床直ではないやや浮いた出土位置の遺物も、少なくとも「下層」出土までは廃絶時一括としてよい。実際に、出土土器に若干の「型式」幅はあるが、同一「様式」幅としてよい **(Fig.12)**。なお床面に近い最下層から弥生時代後期中頃の甕下半部が出土したが（PL. 1 － 5）これが最も遺存度が良く、他は土器破片のみである。

・ＳＣ２１（Fig. 9、PL. 3－5、カマドは Fig. 8、PL. 3－6,7、PL. 4－2,3）

Ⅱ区で検出した極暗褐～暗褐色覆土の竪穴建物。北西部から北側を撹乱により削られ、中央北東側にも撹乱があり、また南辺は調査区外である。検出できたのは東西 3.1 ～ 3.2 m×南北 3.9 m以上とな

るが、カマドは南東隅と考えられ、南北4.1 mだろう。N－14°－Wの長方形となる。深さは10～15cmの遺存だが、より古いＳＣ０１に比べて浅いのは、元から比較的浅い竪穴だろう。カマドの存在と規模から「住居」と認定する。南北辺は不明だが、東西辺に壁周溝がある。床面は北側が少し低い。貼床はあるが全体にＳＣ０１より薄く、掘り方に凹凸があまりない。ただしカマド付近のみは掘り方の凹凸が顕著で貼床が厚かった(Fig.8下段、PL. 4－3)。なお主柱（穴）は存在せず、壁立ち構造の可能性がある。

カマド(Fig. 8、カラー写真は裏表紙下

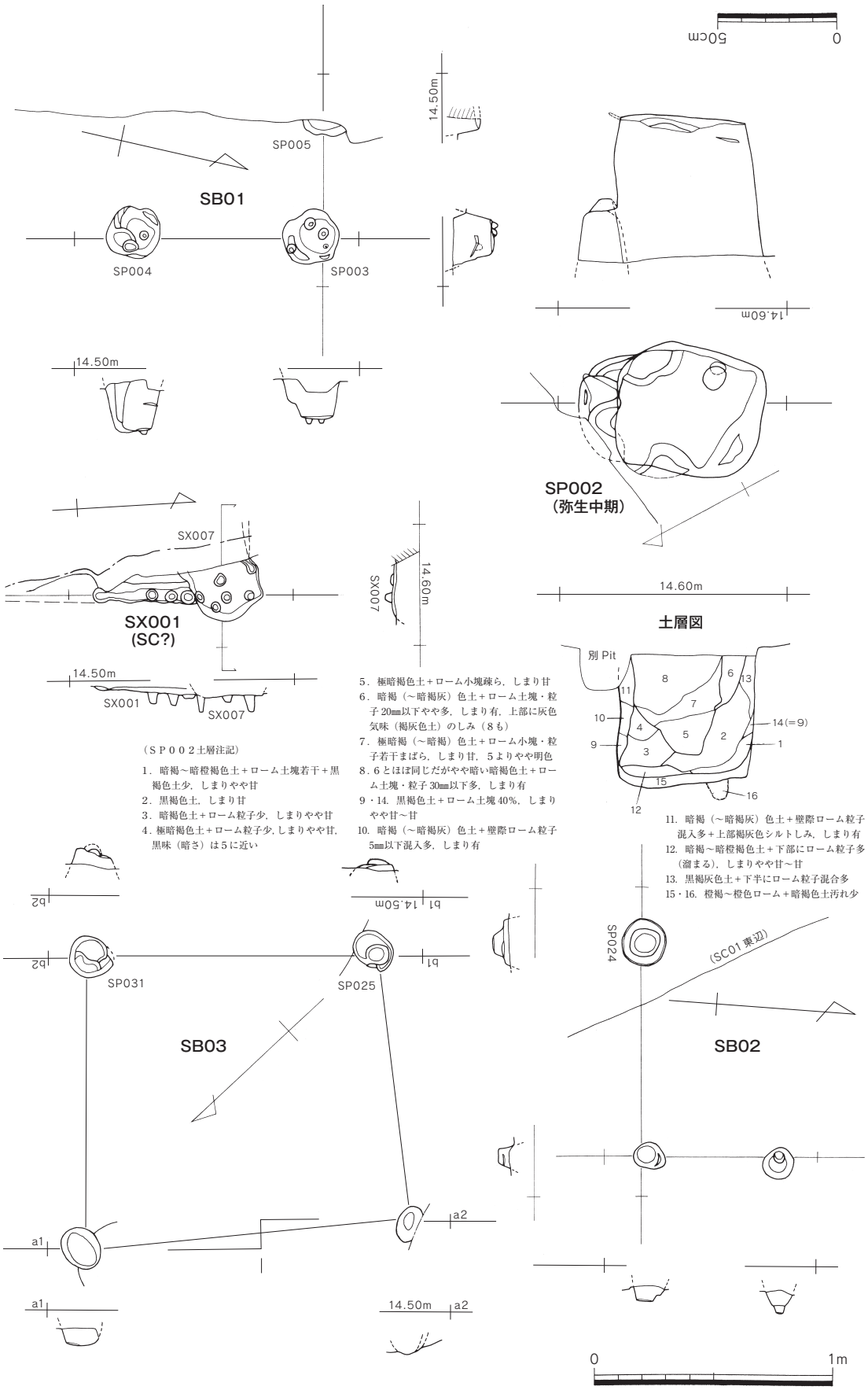


Fig.11　掘立柱建物（ＳＢ）・不明遺構（ＳＸ）・柱穴（ＳＰ）実測図（1/50,SP002は1/25）

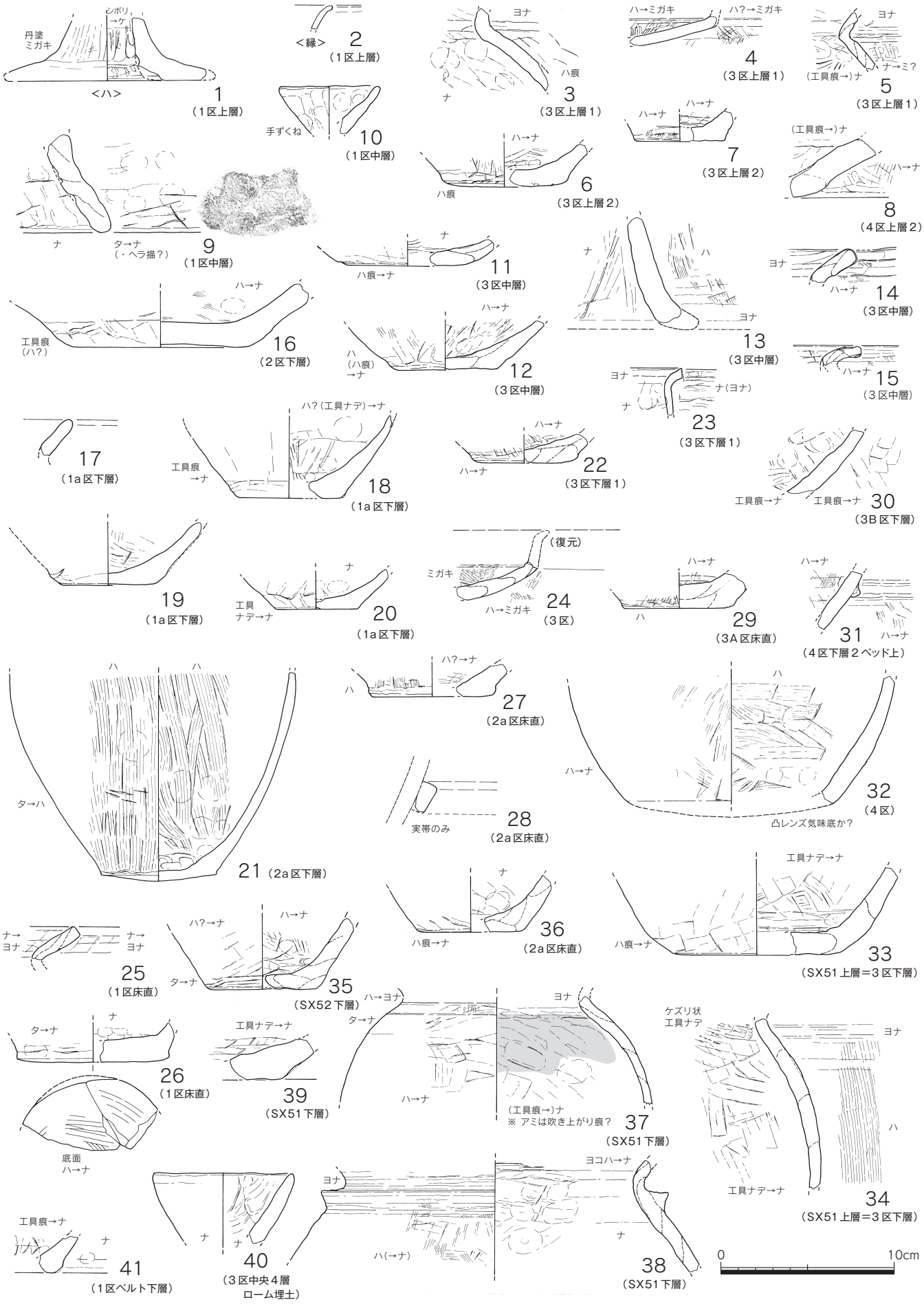


Fig.12　SC01 出土土器実測図（1/3）

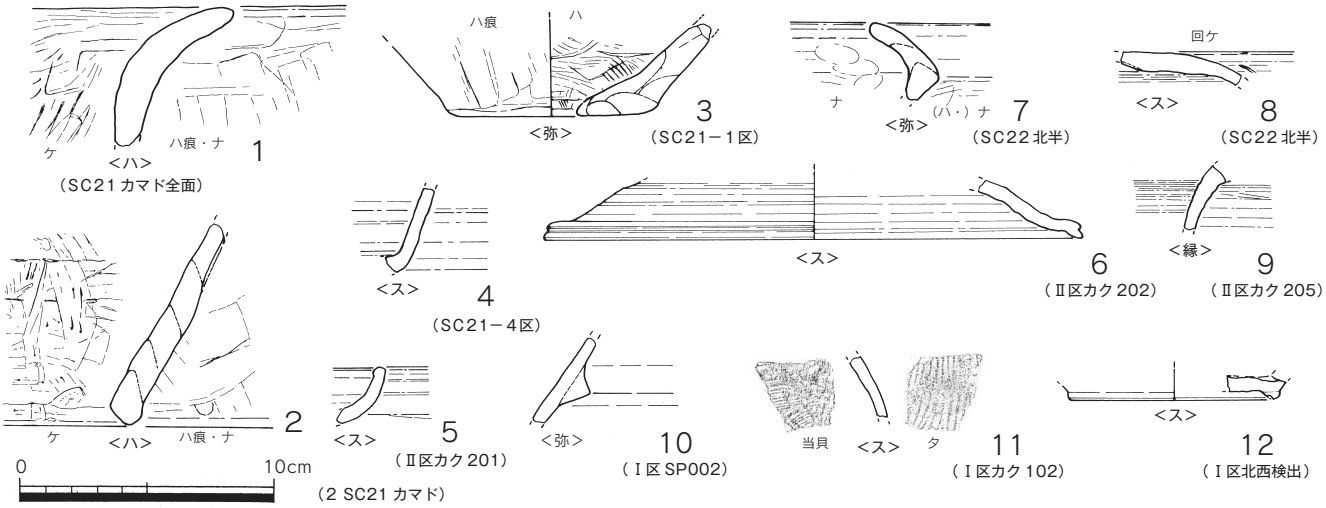


Fig.13　SC21，SC22，その他遺構出土土器実測図（1/3）

段）は竪穴南東部にあり、東向き煙道という特異な形式。もしカマドが壁中央ならば、竪穴の平面形が細長くなり過ぎる。カマドの認識は容易で、中央を空けて推定両袖の粘土ブロック（右袖は調査区壁に僅か）が分かり、その間の竪穴壁際にカマド天井部崩落と推定できる焼土塊が認められた（PL. ３－6,7、裏表紙下段左）。掘り進むと、灰白色粘土主体の袖部が分かり、また燃焼室中央床面に焼土面があり（裏表紙下段右）、東側の竪穴壁がカマド部では傾斜が緩く、その面が僅かに焼けており煙道痕跡であろう（Fig. ８上段）。カマド前面には、住居廃絶時にカマドを壊したと思われる粘土ブロックが床面に散在する（PL. ３－７、PL. ４－２）。この中に土器片を廃棄しているが意図的だろう。出土遺物は少ないが、土師器甕・甑の破片（Fig.13 － 1,2）、須恵器坏身（Fig.13 － 4）があり、ＳＣ２１を切る撹乱出土の須恵器（Fig.13 － 5,6）も本来伴うだろう。須恵器坏身と坏蓋（Fig.13 － 4,6）から、牛頸窯跡群編年（註１）のⅦＡ期古相、８世紀第１四半期であろう。（註１）舟山良一 2008「Ⅴ．出土遺物の検討 １．須恵器の編年」『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財調査報告書第 77 集、大野城市教育委員会

・ＳＣ２２（Fig.10、PL. ４－4,5）

Ⅱ区南東で検出した小竪穴。東側は調査区外。南北 2.2 ～ 2.4 m×東西 1.7 m以上。方位はＮ － 16°－ＷでＳＣ２１に近い。カマド不明、壁溝はないが、貼床が一部にある。南東部が台状にわずかに一段高いが（数㎝）、竪穴東側が新しい遺構の重複と掘り方の凹凸が重なり不明瞭な部分がある。おそらく「竪穴建物」としてよいだろうが、主柱（穴）は不明。ＳＰ３１・３２は新しい。ＳＫ３５は竪穴を切ると考えたが、あるいは主柱の抜跡の可能性もある。覆土は暗褐色～極暗褐色土でＳＣ２１と同じかやや淡い（明るい傾向）。したがって方位の同一性から同時期とみてもよいが、やや躊躇するところもある。同時期とすれば、「住居」ではない、「作業小屋」や「納屋」のような性格か。出土遺物にやや長い研石がある（Fig.14 － 3）。また僅かな須恵器片（坏蓋）はＳＣ２１と同時期でもよい（Fig.13 － 8）。

（２）掘立柱建物（ＳＢ）

掘立柱建物は３棟推定した。**ＳＢ０１（Fig.11 左上、PL. ４－６）**は、調査区外西側隣地に延びる（Fig. ３、Ph. ２）。東西４間（4.1 m）以上×南北１間（1.5 m）以上、方位Ｎ－ 77 ～ 79°－Ｅ。調査区内３柱穴の深さは SP004 が 40㎝、SP003 が 35㎝、SP005 が 20 で推定梁間の２柱穴がやや深い。いずれの覆土も暗褐色～極暗褐色で古代でよい。方位もＳＣ２１・２２に近い。**ＳＢ０２（Fig.11 右下）**は、SP024 がＳＣ０１を切る。東辺の柱間が狭いのは隅角の束柱だろう。おそらく北側に展開する。１×１（1.8 m× 1.1 m）間以上、Ｎ－ 86°－Ｗ。ＳＣ０１覆土を切る柱穴がまだあった可能性もあるが不明。古代～中世。**ＳＢ０３（Fig.11 左下）**は、１×１間（2.4 ～ 2.7 m× 2.3 ～ 2.4 m）の歪んだ建物。方位Ｎ－ 38 ～ 43°－Ｅ。ＳＣ２１・２２を切る。

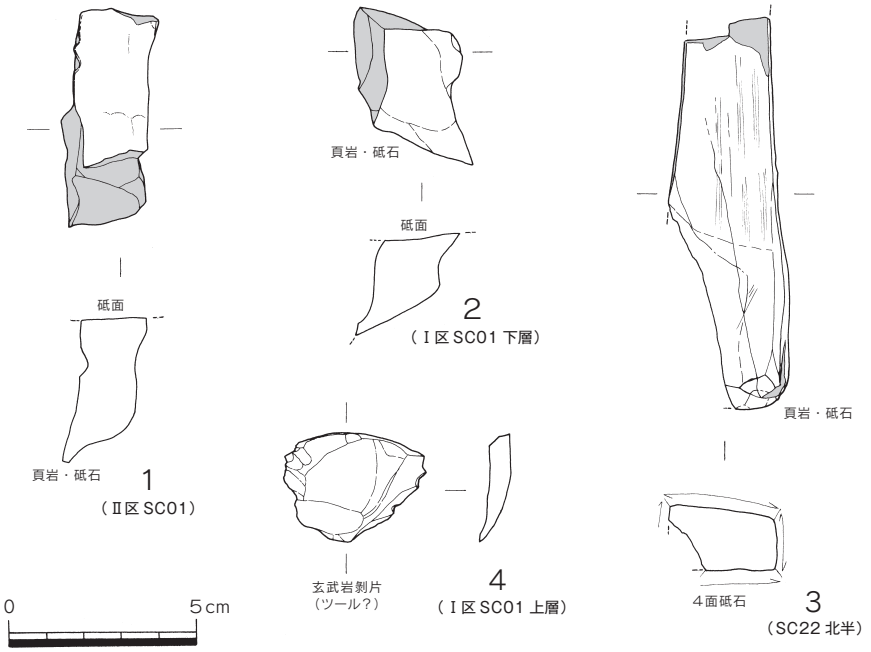


Fig.14　麦野Ａ22次出土石製品実測図（1/2）

（３）弥生時代の柱穴

ＳＰ００２（Fig.11 右中段）は、埋土が黒褐色～極暗褐色主体の55 × 60㎝の方形柱穴。深さ55㎝。長軸Ｎ－33°－Ｅ。北東側は新しいピットに切られる。覆土がＳＣ０１と同じ。土層は柱を抜いた痕跡の可能性。ただし対応する他の柱穴は調査区内に無く建物としては不明。出土遺物（Fig.13－10）は弥生時代中期後半前後の壺の下部と見られる。ＳＣ０１に先行する集落遺構が存在した可能性を示す。

Ph.2 SB01 調査区外西側柱穴検出状況（隣地確認調査時、作業員の場所がSP005）

（４）不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ００１とＳＸ００７（Fig.15 左中段）は重複にも見えるが、おそらく一連のもの。ＳＸ００１は竪穴建物の壁周溝とピット列で、ＳＸ００７は竪穴の掘り方の凹みか。竪穴の壁が削平されたものだろう。東辺1.4ｍ以上、Ｎ－４°－Ｅ。

３．出土遺物（Fig.12 ～ 14）

紙幅がないので簡単に説明する。図中（Fig.12・13）に、遺物の種類や調整についての説明を入れており、その凡例は以下の通り。**＜ハ＞＝土師器、＜弥＞＝弥生土器（ただしFig.12の弥生土器は特に注記せず）、＜ス＞＝須恵器、＜緑＞＝緑釉陶器、（調整）「ケ」＝ヘラケズリ、「ナ」＝ナデ、「タ」＝タタキ、「ハ」＝ハケメ（木目条痕）、「ヨナ」＝ヨコナデ、「ミ」（ミガキ）＝ヘラミガキ、「痕」＝痕跡、「ヨコハ」＝ヨコハケ、「回ケ」＝回転ヘラケズリ**

ＳＣ０１出土土器（Fig.12）は、ほぼ弥生時代後期中頃の土器。甕・壺類の底部は平底から凸レンズ底まである過渡期で、後期中頃でも後期前葉に近い様相を残す。**4・24**は坏部上半を欠くが瀬戸内系高杯在地化直後の型式。**9・13**は器台。**23**は弥生前期後半の甕。**1**は飛鳥時代後半の土師器高杯か。**2**は**緑釉陶器**で混入。**ＳＣ２１に伴う土器（Fig.13－1,2,4 ～ 7）**は説明した。弥生後期土器（Fig.13-3.7）は本来ＳＣ０１の帰属だろう。**緑釉陶器**がもう１点あり（Fig.13－9）、ＳＣ０１上層の１点とともに９世紀の須恵器坏身（Fig.13－12）と関連するか。**石製品（Fig.14）**は、ＳＣ０１もＳＣ２１も砥石主体だが、**4**の玄武岩剥片ツール（？）は弥生前期だろう。

Ⅲ．調査のまとめ

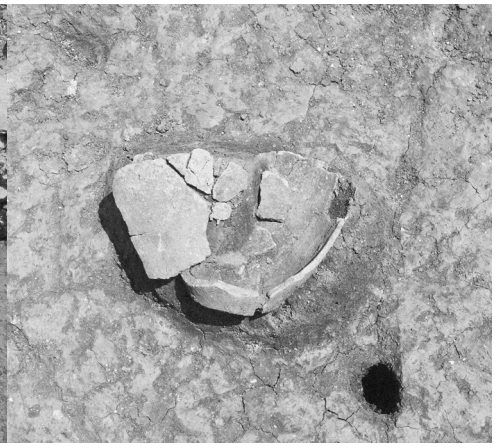
本調査では、周囲に多い奈良時代前後の集落遺構とともに、これまで分布のなかった弥生時代中期後半と後期中頃の集落遺構が認められた。今後、遺跡北半でこの時期前後の遺構の検出が予測される。

1．Ⅰ区全景（東から）

2．Ⅰ区 SC01 上面検出状況（東から）

3．Ⅰ区 SC01 ベルト土層（南から）

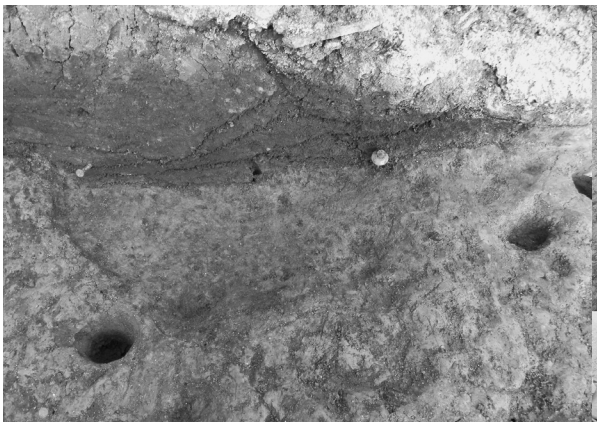
4．Ⅰ区 SC01 床面検出状況（西から）



5．Ⅰ区 SC01 中央下層土器出土状況（西から）

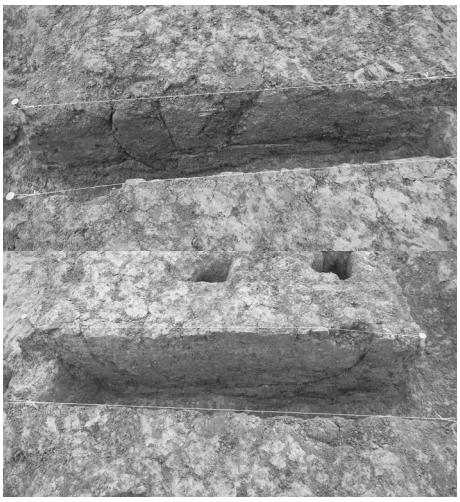
1．Ⅰ区 SC01 床面検出状況（南から）

2．Ⅰ区 SC01 掘方完掘状況（南から）



3．Ⅰ区 SC01 炉址検出状況（西から）

4．Ⅰ区 SC01 掘方完掘状況（東から）

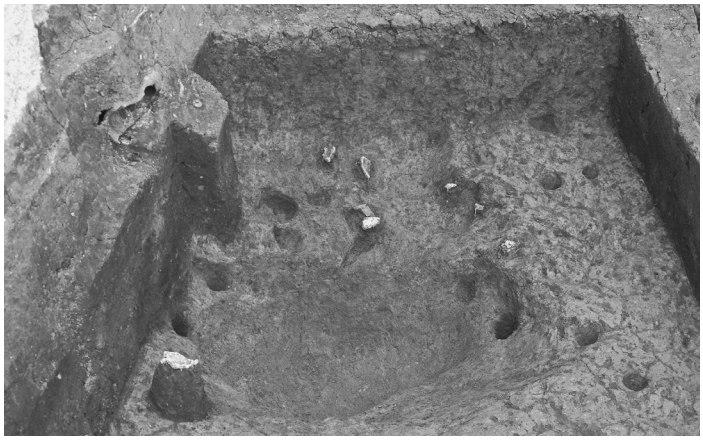


5・6．Ⅰ区 SC01 南ベッド部トレンチ土層
（東から／西から）

7．Ⅱ区 SC01 検出時南ベッド部土層断面（南西から）

1．Ⅱ区 SC01 床面検出状況（北から）

2．Ⅱ区 SC01 ベルト土層（南から）



3．Ⅱ区 SC01 北東床面 SK051（西から）

4．Ⅱ区 SC01 掘方完掘検出状況（西から）

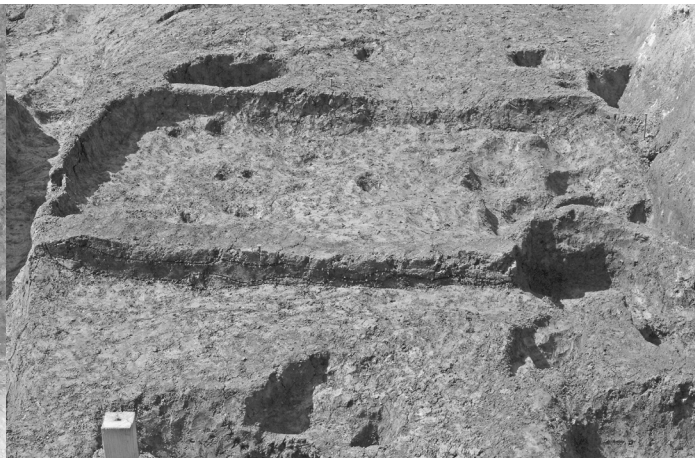
6．SC21 カマド上面検出状況（西から）

5．Ⅱ区 SC21 床面検出状況（南から）

7．SC21 カマド横断土層状況（西から）

1．Ⅱ区全景（西から）

2．SC21 カマド掘削途中（南から）



4．SC22 東西土層（南から）

3．SC21 カマド下部掘削・
左袖部横断面（西から）

5．SC22 掘方完掘状況（北から）

6．Ⅰ区 SB01（東から）

報告書抄録

ふりがな	むぎのえーいせき８ ― むぎのえーいせきだい２２じちょうさほうこく ―
書名	麦野Ａ遺跡８
副書名	― 麦野Ａ遺跡第 22 次調査報告 ―
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1298
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810 － 8621　福岡市中央区天神１丁目８－１　電話番号　092 － 711 － 4667
発行年月日	西暦 2016 年 3 月 25 日

遺跡名ふりがな	むぎのえーいせきだい 22 じちょうさ
遺跡名	麦野Ａ遺跡第 22 次調査
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくむぎの２ちょうめ 17 ばん 20
遺跡所在地	福岡市博多区麦野２丁目 17 番 20
市町村コード	40130
遺跡番号	0048
北緯	北緯 33 度 33 分 15.5 秒（世界測地系）
東経	東経 130 度 27 分 32.1 秒（世界測地系）
調査期間	2014.7.16 ～ 2014.08.16
調査面積（㎡）	110.05㎡
調査原因	個人住宅建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代	竪穴住居（竪穴建物）３棟、掘立柱建物３棟、竪穴状遺構１、土坑３、柱穴	弥生土器(前期・中期・後期)、土師器（飛鳥時代、奈良～平安時代）、須恵器（奈良～平安時代）、緑釉陶器、石製品（砥石）、剥片石器（弥生時代?）	これまでの麦野Ａ遺跡の調査では、古代から中世の遺構・遺物の検出が主体であった。弥生時代は前期中頃～中期初頭の貯蔵穴等が若干検出されているが、弥生時代中期前葉から後期の遺構の検出は無かった。しかし今回、弥生時代中期後半頃の柱穴と、後期前葉～中頃の竪穴住居が検出されたことから、調査事例の少ない遺跡範囲の北側に、当該期の小規模な集落が分布している可能性が生じることになった。 弥生時代後期の竪穴住居ＳＣ０１は、床面中央に炉址、東辺中央に屋内土坑を有する。北側は不明だが南西と南東の二隅には「ベッド状」遺構がある。竪穴住居の埋没過程は、土層から外縁部の黒色土堆積以外は意図的埋め戻しが考えられる。住居廃絶後に放置されたものでないとすれば、周囲に直後の住居が存在するだろう。また主柱穴不明のＳＣ０１は、ベッド付長方形２本主柱竪穴住居の確立過程での過渡的住居型式であろう。 奈良時代のＳＣ２１のカマドは南東隅に設置されたと判断されるが、方角や竪穴内での位置が特殊であり、類例の比較検討が必要である。同時期の可能性がある小竪穴のＳＣ２２は、カマドは不明だが、明確な貼床がある。一部に台状の高い床部があり、「住居」ではない作業小屋であろうか。その他、同時期の掘立柱建物も存在し、母屋の竪穴住居を中心とした集落内の一単位の可能性もある。

麦野Ａ遺跡８

― 麦野Ａ遺跡第22次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1298集

2016年3月25日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印　刷　石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3丁目21－10